



〈第七十一回〉

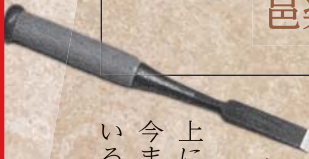
若い人たちに語り継ぎたい、  
 次の世代に残しておきたい。  
 貴重な話をお届けします—。

## あすへひとこと

いつの時代までも残したい

### 邑楽町の昔ばなし

いよいよ梁も上げ終ろうとした時、頭が棟梁に心配そうな顔つきで何か話しています。棟梁の顔は真っ青になりました。材料の墨付けから、仕上がりの柱や梁をはじめ小物材料一切を数え確かめて、完璧だと今の今まで自信を持ってきただけに、この時点で困ったことが起きてしまいました。梁の束が一本不足していました。梁の上に建てる短い柱です。こんなことは今まで一度もありません。大勢の見ている場所で、しかも施工主の主人が目



の前にいます。このとき、困り果てた棟梁に主人が、「棟梁、ありがとう。私どもでもぜひ、梁束の一つぐらい古い壊した家の材料をつかって下さい」と頼みました。そして見ていた人に聞こえるように「棟梁、何事も満ればかけるのことわざがあります。日光東照宮・陽明門の柱も、十二本のうちの一本は逆さ模様にしたそうですねえ。棟梁は考えあつてのことだったんですねえ」と述べました。棟梁は顔から火が出るような思いでしたが、主人の助け船で恥もかかず立派に棟上げをしたそうです。これをそばで聞いていたお客や助っ手たちは「棟梁の話では、新しく家を建て替える時には梁でも束でも、何か古い家の材料を少しでも利用するように大工に頼むものだそうだ」と語り伝えたといわれます。

新築の家の主人は、よほど度量と教養のあった人でした。だれも傷つけず、かえって棟梁の株をあげた結果になりました。また、古い家には長い間住んだその家の先祖様の魂がしみ込んでいるので、古材を利用することは、先祖の心をいつまでも引き継ぐことにもなるという言い伝えもあります。



昔は大黒柱、天井には梁という家。現代ではおしゃれとして梁を見せる家。昔の人は意外とおしゃれだったのかもしれない(写真はイメージ)

### 新築の家に古い梁束

江戸時代の初め、家を建て替えることになりました。この工事には、こちらで評判の腕利きの棟梁を頼みました。棟梁にとっては一生に一度の大仕事。材料選びや職人の指名にも気を配り、万事不都合のないように努めました。大工仕事も順調にはかどり、いよいよ棟上げということになりました。その頃は、母屋の新築には村中の人が出て、家を壊してから、あと片付け、盛り土、地ならし、土台基礎の鎮圧まで助っとなりました。棟上げともなると、大勢が集まってお祝いをしました。棟梁と頭は新しい印半纏で得意そうにあれこれ指図していました。



【発行】 邑楽町老人クラブ連合会 【編集】 あすへひとこと編集委員会  
 平成 10 年 12 月 31 日発行「高齢者の語り(第六集)あすへひとこと」より



名月待ち  
 (狸塚地内)



Photo 広報担当者Ⓞ

### ひとりごと From editors

▶ 邑楽中学校水泳部女子リレーチームの全国出場。26年前に出場したメンバーのうち2人に会うことができました。予選で2つ隣のレーンに岩崎恭子さん(後の五輪メダリスト)が泳いでいたそうです。▶ 26年前も県記録を更新しての優勝でした。そのタイムは4分22秒96。身体的な発達、技術向上、水着の進化も相まって。26年間で縮められてきたタイムは14秒94。▶ 防災訓練である男性「邑楽町はさ、大きな自然災害の被災経験がないじゃない…怖いよ、災害は…」。▶ インタビューの最後「一度、真剣勝負をお願いしたい」。日本代表の彼女には言えなかった野球経験者の私。▶ 「記念日」を探しています。あなたが「記念日」と言えば、それは記念日です。そのエピソードとともに聞かせてください。(深澤)